

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第24回 あさ い れい ぞう 浅井 礼三

才能が花開く

浅井礼三は、大正6(1917)年、印旛郡成田町成田(現在の成田)に父儀助、母ちかの三男として生まれた。

昭和5(1930)年、成田中学校(現在の成田高校)に入学。野球部に入部し、三塁手、遊撃手として練習に打ち込んだ。

昭和10年、早稲田大学に入学し、野球部に籍を置く。当時、野球といえば東京六大学野球であり、早慶戦ともなると、神宮球場前に入場券を入手するために並ぶ徹夜組が出るほどの人気であった。そんな花形の野球部に入部してくるのは、ほとんどが全国中等学校優勝野球大会(現在の全国高等学校野球選手権大会)で活躍したエリートであり、礼三のような大会出場経験のない無名の中学出身者は少数であった。そのような中でも礼三は臆することなく、人一倍の工夫を重ねて練習に励み、中堅手としてレギュラーに選ばれた。同15年の東京六大学野球大会春季リーグ戦では4割3分2厘という成績で首位打者となる。守備も盤石で、百万ドルの名外野手とうたわれた。

野球一筋の人生に

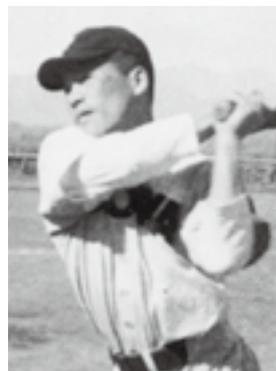
大学在学中から成田中学校野球部に顔を出していた礼三は、働きながら休日を使ってコーチとして練習に参加した。早稲田



左/都市対抗野球で準優勝の白獅子旗を受け取る
右/優勝賞品のオートバイとともに

大正6年～昭和60年(1917～1985)

印旛郡成田町成田(現在の成田)に生まれる。早稲田大学で中堅手として活躍し昭和15年には六大学リーグで首位打者になる。戦後、指導者として成田中学校(現在の成田高校)野球部を全国中等学校優勝野球大会出場へと導いた後、社会人野球の選手となる。都市対抗野球に出場し、大昭和製紙(現在の日本製紙)を初優勝へと導く。



大学の練習方式を取り入れた指導は非常に厳しく、中でもエラーをすると一歩前に出され、際限なく続けられたという「鬼のノック」は学生たちに恐れられた。

昭和21年には、戦後初の全国中等学校優勝野球大会が開催された。成田中学校は南関東代表として初出場を果たすも、セーフと思われたホームインが球審によりアウトと判定され、0対1で初戦敗退。その悔しさから次こそはと、礼三の指導はさらに厳しさを増した。そして同22年、成田中学校は同大会でベスト4という好成績を残す。その翌年も大会出場を決め、成田中学校は3年連続出場を果たした。

大昭和製紙(現在の日本製紙)の子会社である秀美堂印刷で働く礼三は、大昭和製紙の野球部創設に関わり、自らも選手として参加した。都市対抗野球大会でチームは創部3年目にして準優勝を収める。その戦いぶりから「東海の暴れん坊」と呼ばれ、野球ファンを魅了した。その4年後、礼三は豪放に時には繊細にチームを導き、大昭和製紙に初優勝をもたらした。

昭和60年、野球一筋に生きた礼三は67歳の若さで、その生涯を閉じた。

その野球センスは野球界の万人が認めるところで、巨人の黄金期を支えた千葉茂氏が、礼三がプロ野球に入っていたら一、二を争う選手になっただろうと話していたという。

取材協力・石原利男さん(土屋)

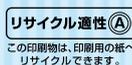
編集後記

広報課では5月からInstagramを始めました。Instagramはインターネット上で写真や動画を共有することができるサービスです。成田の魅力ある風景や食を探して市内を回り、ハッシュタグ「#なりたさんぽ」で投稿しています。Instagramをやっている皆さんも、近所のおいしいお店や、すてきな景色など、成田に住んでいる人しか知らない隠れた魅力を「#なりたさんぽ」で世界に発信してみませんか。

令和元年6月15日号 No.1389

成田市のホームページ

<https://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。